

史料館所蔵最古の歩兵第十六聯隊史

「第二回」明治二十七、八年戦役

元新発田駐屯地援護室 佐藤 和敏

【開戦の理由及び其の発端】

日清戦争とは即ち明治二十七、八年、我が帝国と隣国清との間に行われたる戦争で、又明治二十七、八年戦役とも称す。

其の原因は、尚未だ世人の記憶に新たなるが如く、明治十七年韓国京城の変、同防穀令事件及び二十六年の金玉均暗殺事件等、悉く其の遠因を為して居るが、其の直接の原因となったものは、二十七年四月韓国に起こった東学党の乱である。

東学党は武力を以って、国政の改善を断行せんとし、先ず北辺の諸道を風靡して、五月全州に抛って將に京城を衝かんとした。従来ややもすれば韓国を属邦扱いにして居た袁世凱（当時の駐韓清国公使）は、韓国を名実共に全く其の属邦と為すは、此の機に在りとなし、狼狽恐怖せる韓国政府を脅迫して、強いて清国に出兵を請はしめ、天津条約を無視して恣に韓国に向って出兵するに至った。

よって我が政府は、急遽大島公使（圭介）をして、八重山艦の陸戦隊を率いて京城に入らしめ、次いで陸軍少将 大島義昌に混成旅団を授けて、同じく京城に入って内外の警戒に当らしめた。是より日清両国間の国交は、愈々危殆に陥り、大島公使は所謂五箇条の改革案を引提げて韓国王に迫った。

次いで韓兵の発砲となり、之が撃攘となり、はたまた袁世凱の遁逃となりて、遂に七月二十五日豊島沖に於いて砲火は彼我軍艦の間に開かれ、陸軍は牙山成歓に兵を交え、清将葉志超の軍を討って、大いに之を破る。

開戦の理由は韓国の独立を擁護し、併せて東洋に於ける帝国の位置を確保せんとするに外ならぬので、八月一日宣戦の詔勅は煥発せられた。

【聯隊の動員・出征】

二十七年九月二十五日、第二師団（聯隊は当時第二師団に属す）動員を令せらる。

聯隊長 福島大佐は直ちに各将校を招集して戦時職務を命課し、出戦の準備に取りかかった。歓呼の声は沸く如くに営内の各所に起こり、応召者は即時犁鋤（りじょ：くわ、すき）を棄てて勇躍踵を接して到る。

同月二十八日、早くも充員を終わり十月三日、聯隊長は街裏練兵場にて野戦隊の武装検査を行い、部下一同に左の諭告を下す。

「出征に付諭告」

「今回充員の下令あるや、各自家を忘れて争って召集に応じ、予定期日に先だつこと二日にして要員を充足することを得たり。これ畢竟諸士が忠君愛国の氣象に富み、軍人の職分を確守せるに職由し、予の最も満足する所なり。

そもそも今回の開戦は、我が帝国の浮沈に関する未曾有の事件にして、しかも国威を發揚するの最好機たり。其の勝敗如何は直ちに我が帝国の盛衰榮辱に係るのみならず、又東洋の局面に影響すること大なり。而して此の重任は一つに軍人の双肩に懸かる。諸士の任重且つ大なりと云うべし。且つ夫々強を挫き強を破るは軍人の潔しとする所、彼老清国、固より我に敵するの勇なしと雖も、其の兵力の如きは殆ど我に幾倍するものあり。又以つて我が武を試みるに足らん。

諸士勉旃誓って奮進、敵を殲滅して後已み、上は大元帥陛下の宸襟を安んじ奉り、下は聯隊の光榮を發揚せんことを期すべし。其の各自の名誉の如きは、長しえに皇土と終始せんのみ。終わりに臨んで更に一言す。諸士須く其の健全を保ち、砲声場裡 陛下に忠事するの榮を全うせよ。我が聯隊充員の完成に際し、茲に諸士に告ぐ」

是より日々猛烈なる教練を実施して、戦闘能力の増進を計り、待命三旬（月の上旬・中旬・下旬で30日間）愈々出征の命に接して、十月二十六日地方官民の熱誠なる万歳の声に送られつつ新発田の兵營を出発し、若松街道を経て郡山に出で、同地より鉄道輸送に依りて、十一月六日広島に到着し第二軍戦闘序列を命ぜられ、同市に滞在して命を待つこと六旬（60日）此の間又も日々訓練に従事してひたすら戦闘力を養いつつある間に、光榮ある戦勝の第一年は暮れて、二十八年の春となった。

一月六日将校同相当官は、大本營に召されて大元帥陛下に拝謁仰せ付けられ、次いで和泉邸に於いて酒肴を賜り一同聖恩の優渥なるに感激した。

此の時、山縣大将（後に野津中将代る）の率いる第一軍（第三・第四師団）は、平壤・九連城・鳳凰城等に連勝して、既に摩天嶺を越え、海城を抜き、更に進んで遼陽に迫らんとし、花園口に上陸したる大山大将の第二軍はすでに旅順を屠り、其の一部は更に遼陽に進み、蓋平を陥れた。然しながら作戦目標たる北京に進むには、先ず威海衛の軍港を我が手中に収めて置くの必要があった。

威海衛は旅順と相俟って、清国北洋の開門にして、当時港内には曩に（先に）黄海の戦いに敗れて遁入せる軍艦数隻、尚残存し陸兵の該要塞を守備せるもの又一万二千を下らずと伝えられた。

茲に於いて第二師団及び第六師団（歩兵第十旅団欠）を以って臨時山東作戰軍の編成を命ぜられ、大山大将自ら之を率いて威海衛に向うこととなり、聯隊は一月十日宇品を出帆して、一旦清国盛京省大連湾に到り、此処に軍の集中を行って十九日同湾を抜錨し、二十日朝、山東半島の東端栄城湾に入った。

【威海衛の攻略】

帝国軍艦八重山・天龍・海門・麻耶の諸艦先着して既に同湾内に在りて、陸上の敵に砲撃を加え、次いで陸戦隊を揚陸せしめた。此の掩護砲撃の下に我が第九中隊は敵の射撃を蒙りつつ小西庄の東端より上陸し、敵を駆逐して其の西北地を占領して上陸掩護の任に当たり、聯隊は師団の先頭に立ち上陸す。

此の日我が上陸を妨害したる敵兵は、載某の部下たる一百名余にて、第九中隊の一撃を受けるや、銃四挺、弾薬一万六千発、旌旗（はた、のぼり）若干、太鼓三、榴散弾三十、其の他糧食材料を遺棄して潰走した。

同夜續紛たる飛雪を冒し、酷烈なる寒気を衝いて、夜半栄城縣に入り二十六日同地を発して攻撃前進の途に上り、二十八日には旅団前衛となり、第三大隊を前兵として温泉湯附近に進出し、近く敵と接触して徹宵（夜どおし起きていること）警戒に任じ、明ければ二十九日午前九時、歩砲兵連合の敵兵約一千は温泉湯部落の西方虎山方面より我が正面を指して前進して来た。

依って前哨第三大隊は、直ちに抵抗線に就いて之に銃火を開いたが、折から天候いよいよ陰悪となりて、大風雪を飛ばして面を撲ち、展望も標準もあつたものでなく、地形不利を極め戦況毫も進まず。

茲に於いて聯隊長は第二大隊を第一線に増加し、更に第一大隊をして敵の右側を衝かしめ、相呼応して力攻したる為対戦三時間にして敵は退却し去った。此の戦闘に下士卒四名戦死し、同十三名負傷した。

翌三十日、聯隊は又も旅団前衛となりて前進し、楊家屯高地に抛れる敵を撃攘して之を占領し、混乱潰走する敵に猛烈なる追撃を加えて多大の損害を与え、追尾して海岸に出や忽ち港内に在る敵艦より酷烈なる砲撃を受けて死傷者続出するに至った。

殊に第一大隊の旗手、軍曹高橋佐太郎は敵砲弾に跳ね飛ばされ壮烈なる戦死を遂げ、一時大隊旗は地上に委するに至つたが、勇敢なる一等卒 室橋富蔵は濛々たる砲煙の下をくぐり行きて之を捧持し、漸く全きを得た。甚だしきは、一弾の炸裂に依って十有九名を斃すなど、一時苦戦を極めたが毫も屈する所なく奮戦し、遂に海岸一帯の高地を占領して威海衛湾の半面を我が手中に収めた。

此の日の損害、戦死 高橋軍曹以下四十名。負傷 高木軍督以下五十二名。

是と同時に、右翼第六師団（一旅団欠）は百尺崖方面の敵砲台を占領し、我が第四師団も又威海衛の東南面一帯を略取し、又我が聯合艦隊は風浪と夜暗とを冒して、連日連夜海上より猛烈なる攻撃を加えたる為、敵の陸兵は寧海洲街道より退却を始めた。依って師団は之を追撃して、二月一日羊亭集附近に於いて其の後衛を撃破し、次いで第一中隊は威海衛方面の強力偵察を行わしめ、翌二日全く陸上諸砲台並びに兵營を占領した。

爾後敵の艦隊は、独り湾内に在りて最後の抵抗を続けていたが、大勢すでに定まれる事とて、後数日にして北洋水師提督丁汝昌は自殺し、艦船及びそれに乗組める五千有余の戦闘員は我に降伏し、二月十二日威海衛の海陸全部我が有となった。

【平和克復・遼東守備】

威海衛我が手中に帰して、山東作戦軍の目的は達成せられたるを以って、愈々第二期作戦に入るべく、再び金州半島に兵力の集中を図り、聯隊は第二大隊（第五・第六中隊欠）を劉公島の守備に留めて、二月二十八日威海衛を出帆し、三月三日旅順口に上陸、同地北方将家屯附近に滞陣して鋭を養い、只管次期の大活躍を待っていた。

斯かる間に第一軍は、三月四日牛荘の市街戦に敵を粉碎し、三月九日田庄台の激戦に於いて再び大打撃を加え、茲に全く遼河平原より敵兵を一掃して、更に内地に待命中の近衛及び第四師団を招致して一挙に清国の首都北京を衝かんとするに至って、頑迷なる清国政府も遂に覚醒する所あり。

全権大臣李鴻章を我国に派して和を請い、我が全権委員伊藤博文・陸奥宗光を馬關に会して講和条約を議し、三月三十一日休戦命令下り談判の結果清国は韓国の独立を認め、遼東半島・台湾島・澎湖列島を我に割譲し、更に軍費二億テイルを弁償する事となって、四月十七日和議成立し、同二十一日平和克復に関する詔勅を煥発せられ、次いで五月十日遼東半島還付に関する大詔あり、同十三日特に優渥なる勅諭を陸海軍人に下し給う。

五月十八日、師団は第二軍の戦闘序列を解かれて、占領地総督、佐久間中将の隷下に入り（師団長佐久間中将、占領地総督に任ぜられ陸軍中将乃木希典当師団長に補せられる）爾後九月下旬に至る迄、第二大隊は金州、第三大隊は岫巖、聯隊本部及び第一大隊は九連城附近に分屯して、占領地の守備勤務に服した。

此の間或いは清兵の状況を偵察し、或いは草賊の掃討に従い、且つ広濶なる兵站線の守備に任じ、其の労苦決して戦時に譲らず、季大暑に入るやコレラ・赤痢等の悪疫蔓延して、哀れ敵弾ならずして異域に不帰の客となるもの少なからず。

なかんずく、中尉庄司公平は将家屯に於いて病に罹り、五月内地に還送の途中船中に於いて歿し、大尉加藤重遠は七月龍王廟に於いてコレラ病の為斃れた。

【台湾征討・凱旋】

講和条約の結果、台湾は新たに我が版図に入り、海軍大将樺山資紀同総督に任じられ、近衛師団は曳底湾に上陸して、我が皇師に抗衡せんとする劉永福征伐の任に当たったが、非徒は殆ど島内に蔓延して反服常なく、兵力の不足を感じずるに至れるを以って、七月下旬当師団より混成第四旅団を編成して、台湾守備隊に増加せられたが賊勢尚甚だ盛んにして、台南を拠点として勢威を四方に張り、之が討滅に多数の日子を費やすときは、蒙昧なる新附の土民をして皇威の尊厳を疑はしめる如き結果に陥る恐れがあるので、急遽之が消滅を期し、南進軍を編成して一挙に台南を衝くに決し、第二師団に出動を命ぜられた。

即ち師団は遼東の守備を第四師団に譲り、十月一日大連湾を出帆して澎湖島馬公に到りて、基隆より来たる混成第四旅団を会し、同十日払暁、軍艦浪速以下三隻に護衛せられて、台湾南部の西海岸に在る東港の南方三里、枋寮海岸に上陸した。

当時賊の首魁劉永福は、部下黒旗軍一万を以って台南府に拠り、別に五千の兵を鳳山に屯せしめ、尚沿道各地に多数の客家賊（満州に於ける馬賊如きもの）を配置してあった。

之に対して我が軍は、近衛師団及び混成第四旅団を北方より南下せしめ、第二師団を南方より進めて台南を挟撃する方略を取ったもので、聯隊は上陸を終わりに枋寮附近に集合したる上、十二日より北進の途に就き主力は海岸本道を、一部は右方山麓の平行路を取って前進し、主力は往く往く東港・鳳山・二層行の各地に敵を撃破し、右側衛は半見庄・頂交水に敵を圧迫しつつ同月二十日、二層溪の線に進出し台南総攻撃の部署方に成らんとする時、偶々情報あり、「賊魁劉永福は、早くも南清に逃げ去り、部下の諸兵四散して台南城内には最早敵の隻影すら無く、秩序混乱して、良民為に堵に安んぜず、速やかに皇軍の入城せんことを待受けている」と、是に於いて二十一日の払暁、聯隊は師団前衛となりて前進し、同府小南門より他隊に率先して城内に進入し、城門高く日章旗を掲げ、別に第十中隊を安平に派遣して残敵を掃討せしめ、又第十二中隊を北方に派して南下軍に連絡せしめた。翌二十二日、近衛師団司令部も亦台南府に入った。

此の間吾が聯隊の損害は、六名の負傷者を出せるに過ぎず、消耗弾薬亦四五十発を出ていなかったが、連日炎熱は金を熔かすに足り、道路は狭隘険悪にして軍を送るに苦しみ、村落市街は不潔にして身を容れるに難く、且つ水質悪くして飲料に適せず、其の苦痛は砲煙弾雨の裡に暴露するに比して遜色なく、況や賊徒は地形を利用して三々伍々各所に隠蔽し、突然踊り出て狙撃を加えるなど、有形的損害の寡少なるに比して其の困難は頗る多大であった。

爾後聯隊は台南に駐屯して守備勤務に服する内、十一月十七日、川越少佐の指揮する討伐隊（第二・第十一・第十二中隊）は、曾文溪の上流陳発なる賊の本拠を攻撃したるに、賊徒は堅要に拠って死守し、攻撃容易に功を奏せず、伊奈少尉以下十余名の死傷者を生ずるに至ったが、砲兵隊の増加を得たるを以って、砲口を揃えて賊塞を轟撃し、賊勢動揺せるに乗じて突撃を敢行し激戦数時、殆ど賊徒を壊滅して遂に賊塞を占領した。

これを以って征台最後の戦闘となし、爾後全く賊徒の影を絶つに至り、爾來聯隊は台南・阿公店・鳳山・打狗港等の守備に服し、二十九年四月十一日、新來の守備隊と交代して安平・打狗兩港を發して帰還の途に就き、同十九日宇品に上陸、郡山・若松を経て五月四日を以って全員新發田に凱旋し、後数日にして復員を終わり全く平時の姿勢に歸った。

此の全戦役を通じて聯隊の総損害は左の如くであった。

戦死、軍曹高橋佐太郎以下四十七名。負傷、七十五名。病死、二六六名。

参考文献

「大正十一年版 歩兵第十六聯隊史」より